

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

明石芳彦著 『進化するアメリカ産業と地域の盛衰』

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学比較地域研究所 公開日: 2020-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉井, 敬人, TAMAI, Norito メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/919">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/919</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



〔書評〕

明石芳彦著

『進化するアメリカ産業と地域の盛衰』

玉井敬人

I

本書は明石芳彦教授による『漸進的改良型イノベーションの背景』(有斐閣、2002年)、『社会科学系論文の書き方』(ミネルヴァ書房、2018年)に続く3冊目の単著である。共・編著を合わせると図書だけでも9冊を超えるきわめて生産性の高い研究者であるわけだが、その研究分野はイノベーション・ベンチャーといった産業・企業研究だけでなく、地域経済・コミュニティといった分野についても近年研究を進められている。

本書のあとがきに筆者はアメリカ研究者ではないが、と自重気味に書かれておられるがアメリカ産業・地域に関する文献の精査はもちろんのこと、数度の現地調査を通じてアメリカの実情の把握に努められてきた。本書はその集大成と位置付けられよう。

評者は大学院生当時から著者のご指導を仰ぎ、また就職してからも学会などを通じて継続して様々な面でご助言を賜っている。恩師の高著を「評する」のは恐れ多いことではあるが、アメリカ研究を志した評者の学恩に報いる一つの形としてそれを表したい。

さて、著者はこれまで産業組織論分野において特許制度や独占禁止法、イノベーションやベンチャー企業などの研究をされ、近年はアメリカ地域(デトロイト・シリコンバレー・サンディエゴ・リサーチトライアングルなど)の産業・企業そしてコミュニティ研究を進められている。

産業組織論からアメリカ研究へとさらにその学究範囲が広がってきている。筆者もはじめにとあとがきにおいて書かれているが、1980年代以降のアメリカ産業構造の変化がなぜ起こったのかその背景と影響について、さらに産業変化は都市・地域にいかなる影響を及ぼしたのかについて以前より関心を持ち、本書においてその研究成果をまとめている。

筆者が本書を上梓するとりわけ大きなきっかけとなったのは次の二冊と思われる。ダートウズス他著、依田直也訳『Made in America—アメリカ再生のための米日欧産業比較』1990年、草思社。

レスター著、西村隆夫他訳『競争力—「Made in America」10年の検証と新たな課題』、

2000年生産性出版。

1980年代から90年代初頭にかけて日本との貿易摩擦が激化し、日本脅威論・日本異質論が盛んに政治・社会面で論じられていた。このような、日本の躍進とは対照をなすアメリカ産業の衰退要因を広く論じたのが、前述の『Made in America』である。そこでは特に日本を意識してその長期的視点に立った経営(それは間接金融・持ち株・系列など)や、政府の役割(貿易障壁・産業政策など)、応用研究を重視としたイノベーション(対するアメリカは基礎研究重視)などの優位性に注目している。また、『競争力』は『Made in America』で論じられるアメリカの短所を含めた企業・産業状況がいかに変化してきているか改めて検証したものである。

今日、当時の日本脅威論は鳴りを潜め、経済・軍事・技術といった様々な面で中国脅威論が台頭しているわけだが、とうのアメリカは1950年代の黄金期に迫るほど失業率が低下し(2019年9月の最新のデータでは失業率は3.5%)、マクロ経済面でのパフォーマンスは良好である。

このような好景気に沸くアメリカも一昔前、30年程前は前述のようにとりわけ製造業の衰退が顕著であり、製造業が集積立地する地域の経済も深刻な不況にあえいでいた。

本書はこのような戦後アメリカの絶不調時と今日の絶好調時の産業・地域の盛衰背景を丹念に分析した極めて意義深いものとなっている。

## II

本書の目次は次の通りである。

はじめに

第1章 アメリカの人口動態・産業構造変化と地域・都市の盛衰

第2章 アメリカの代表的産業の競争力低下

第3章 アメリカ自動車産業の変容

第4章 IT・インターネット関連産業の展開と産業特性

第5章 イノベーション拠点とスピノフ連鎖

第6章 リサーチ-トライアングル・パークの経験と含意

第7章 アメリカ産業の進化とイノベーション

あとがき

以下では各章の内容を簡単に紹介しよう。

第1章「アメリカの人口動態・産業構造変化と地域・都市の盛衰」ではまず、アメリカ経済・産業の変化についてデータ面で確認するために、GDPと従業者数で見た産業構造の変化、経常収支・貿易収支といった国際取引活動の変化、そして利益・収益を生み出す産業の変化それぞれを図表で示し、その変遷特徴を指摘している。次に、アメリカを8つの地域に

区分し、各地域の人口動態・所得水準の変化、大都市圏の人口推移について検証している。

以上の検証をしたうえで製造業の競争力低下に注目し、それに対する学説を紹介して次章への導入としている。

第2章「アメリカの代表的産業の競争力低下」ではアメリカ製造業衰退の象徴として鉄鋼業とカラーテレビ産業に特に注目し、その実態をまとめている。なお、衰退産業の代表格には自動車産業が挙げられるが、それについては第3章で詳細に検証されている。

鉄鋼産業については、1960年代初頭から輸入が急増しているのだが、とくに1970年代後半から日本や欧州共同体からの輸入が増加したことによる利益率の急減と工場閉鎖・レイオフが政治的な動きをもたらす。反ダンピング法提訴や輸出自主規制・輸入割当といった管理貿易は輸入量の減少と鋼材価格上昇による利益率と賃金の引き上げをもたらす一方、品質改善に向けた投資はほとんどなかったことが述べられる。

カラーテレビ産業の衰退についても鉄鋼産業と同様、日本からの低価格製品の輸出攻勢がアメリカ企業を追い詰めたことが述べられるが、鉄鋼産業と異なる点はアメリカのメーカーがこの動きに対して海外への生産シフトという形で低費用生産に固執し、新しい技術への投資がおろそかになったことが指摘される。

第3章「アメリカ自動車産業の変容」ではアメリカ製造業衰退の象徴としての自動車産業、さらにはその代表格であるGMに注目し、その後退要因を検証している。アメリカの自動車産業も前章の鉄鋼・カラーテレビ産業と同様、国際競争力を失った背景には日本企業との競争、高コスト体質の継続、生産性や品質・顧客信頼面での低い向上状況が指摘される。

自動車産業・企業を研究したものは極めて多く存在するわけだが、業界関連資料を活用して同産業・企業環境の変化を分析し、事業実態や事業経営の本質に迫っている点で本章の差別化が図られている。

かつてGMは言わずと知れた世界最大の自動車メーカーであった。ドイツのフォルクスワーゲンやトヨタ、日産連合の後塵を拝してはいるものの、今日においてもアメリカ国内での市場シェアは首位である。競争的地位は低下しているが国内シェアトップの地位は維持しているその要因をいかに理解するか考察されている。

第4章「IT・インターネット関連産業の展開と産業特性」ではイノベーション活動が活発でそのスピードも速い躍進産業としてのIT/インターネット関連産業を分析している。IT(情報技術)産業が発展していく中でハードウェアとソフトウェアそしてサービスの展開における、新興企業の特徴と企業間の競争と協力関係を考察している。そして、ネットワーク型産業システム、産業的新陳代謝の活力源、既存事業者・企業の対応にかかわる特徴と論点が示される。

新興企業としてのアマゾン社、伝統的企業としてのIBM・アップル社の事業展開の差異を論じている点は今日の企業戦略の在り方を理解するうえで大変有益である。

第5章「イノベーション拠点とスピノフ連鎖」ではカリフォルニア州の南部に位置するサンディエゴと中部に位置するシリコンバレーのイノベーションクラスターについて述

べている。ちなみに、サンディエゴ国際空港とシリコンバレー近隣のサンフランシスコ国際空港は約700キロ離れており、飛行時間は1時間40分ほどである。カリフォルニア州を物語る広さである。

まず、サンディエゴでのバイオ・製薬関連企業とIT関連企業のクラスターの発展史を地元研究機関の存在との関係で論じている。次にシリコンバレーでのイノベーションクラスターがスピノフの連鎖により形成されていった過程を説明している。

そして、サンディエゴとシリコンバレーのイノベーションクラスターの差異について論じている。サンディエゴでは最初に知的クラスターが形成され、そこでの活動成果から結果的に産業クラスターが構築されたのに対して、シリコンバレーでは1910年代以降、秀逸な研究成果の事業化とその成功から、独立・創業・スピノフという形態がとられたことを指摘している。

第6章「リサーチ-トライアングル・パークの経験と含意」ではバイオ産業集積地として注目されるノースカロライナ州のリサーチトライアングルパークについて分析がなされている。

デューク大学、ノースカロライナ大学、そしてノースカロライナ州立大学の3つの研究機関を抱える3都市を結んだ地帯をリサーチトライアングルパークと称する。人為的(政策的)に計画・構築され、かつ成功した数少ない成功事例として同パークを取り上げている。

本文ではまず同パークに研究所や企業、そして非営利団体などが相次いで立地していく過程が示される。次に、ノースカロライナ州全体の産業構造・所得水準・失業率の分析がなされるとともに、同パークに内包される市の所得水準や貧困率についてその特徴が指摘される。

同パークは企業研究所の誘致とそれに伴う雇用(とりわけ大学・大学院生)の増大、所得水準の上昇という目的をもって設立され、その目的は達成されたが地元既存産業従事者はハイテク産業での就労に必要とされる職業能力を開発できずにいるという点も指摘される。

そして、同パークはシリコンバレーのようなスピノフ、スタートアップの興隆による産業集積を目標とするのではなく、既存企業の研究活動拠点となることを目標としていたという点に注目している。

第7章「アメリカ産業の進化とイノベーション」では産業競争力の形成と維持、イノベーションの今日的捉え方、産業競争力・研究活動・イノベーションの相互関連性についてこれまでの議論をまとめる形で整理している。

効率的な生産体制を維持し構築していくことで生産費用を低下させ、競争力を維持できる。家電や鉄鋼、自動車の各産業は人員削減という方向以外に効率的な生産体制構築への必要な投資を十分には行わなかった。また、魅力的な製品開発の面で劣り、競争優位を維持できなかったことが産業衰退の原因であると指摘している。

他方、躍進産業としてのIT、とりわけインターネット関連産業では積極的な投資やM&A、新サービスの提供競争が行われている。IT関連産業では生産プロセスごとに専業

特化する企業が登場して垂直分割型の事業展開が進み、活発な競争が早期に誕生していると述べている。

さらに、IT産業ではソフトウェアとの融合を特徴として製品・サービスバラエティの拡充という水平的・セグメント別事業展開と生産プロセスごとの専門化や垂直分割という極めて複雑な融合をしていることを明らかにしている。

### III

以下では本書の意義と今後さらに解明が期待される4つの点について述べたいのだが、先にその4点を列挙しておこう。①競争力の規定、②企業立地とサプライチェーン、③GAFAsと競争政策、そして④その後の二都物語、である。

第一に、競争力という言葉は本書でたびたび登場するのだが、競争力の源泉としてのイノベーションについてどのように規定できるのかの研究が期待される。規模の経済性が発揮される産業においては企業の事業規模が低コスト生産を左右し、それが競争力の源泉となると筆者は述べている。ではIT産業やバイオ産業といったイノベーション活動が活発な産業における競争力の源泉としての同活動はどのように規定できるだろうか。

また、本書では衰退産業として鉄鋼・カラーテレビ、そして自動車産業を、そして躍進産業としてIT/インターネット産業を取り上げているが、それぞれの産業分野で異なる競争力の規定をイノベーションの観点から系統的にまとめるとすれば、産業発展・ライフサイクルの各段階でどのような差別化・類型化がなされるのか、さらに持続可能な産業発展に対する競争力の規定についてもさらなる指摘が期待される。

毎年世界経済フォーラムから国際競争力の国別ランキングが公表される(ちなみに2019年のランキングは一位がシンガポール、二位がアメリカ、三位が香港であり、日本は六位である)。そこでは国の生産性レベルを規定するものとして競争力が位置付けられている。

このランキングをつけるうえで社会制度・マクロ経済環境・教育・労働市場の効率性・イノベーションなどの12の評価項目がある。とりわけイノベーションは重要な評価対象であり、イノベーションランキングは国別に公表されている。このランキングには企業のR&D費支出・イノベーション能力・R&Dにおける産学連携・特許など7つの評価項目がある。

このランキング公表は1979年から毎年行われているが、アメリカの国際競争力の低下に国内から危機感が上がった80年代から90年代初頭にかけては日本が第一位であり、その優位性の低下は生産性、さらには国の経済成長の低下につながると認識されてきた。

本書上梓の背景には前述のIで指摘した1980年代のアメリカ産業の衰退を広範に検証したとりわけ2冊の本が大きく影響していると思われるが、これらにおいても競争力に対する指摘がなされる。長年イノベーション研究に携わられてきた著者の意見を期待したい。

第二に、今日企業活動・立地のグローバル化は自明であるわけだが、衰退産業と躍進産業における海外直接投資・外国企業立地面、そしてサプライチェーン面でいかなる差異が



みられるのかさらなる解明が期待される。

貿易摩擦・対日感情悪化の軽減を図ることから1982年のホンダのオハイオ州での現地生産体制の構築を皮切りに、日本の自動車メーカーはアメリカでの生産体制を整えてきた。近年ではそのアメリカのマザー工場を起点としてサプライチェーンがメキシコやカナダといった周辺国に広がっている。

また、日系企業とアメリカ企業とが合弁会社を設立するというも行われた。それはアメリカ自動車企業自身に大きなメリットをもたらしたと思うが、外国企業立地の地元経済への影響、それは雇用創出や税収の確保といった経済効果の面だけでなく、技術波及の面でもいかなる貢献を時代時代でしてきたのかについてさらなる検証を期待したい。

さらに国際競争力が大きく低下した鉄鋼や自動車産業と、極めて高い国際競争力を有するIT・バイオ・医薬品産業において、現地展開する日本企業との関わりはどのような差異があるかの指摘を期待したい。

企業活動のグローバル化、サプライチェーンの世界的構築に対する研究は今日の産業組織論に限らず、様々な研究分野で進められている。筆者の研究姿勢は文献研究だけではなく、現地調査を通じて生の声も研究に取り入れられてきた。今後はこのサプライチェーンや海外直接投資の影響をさらにまとめられた第二弾を期待したい。

第三に、新たな事業展開形態を有するイノベーション競争の激しいIT産業において、企業競争力を維持しつついかなる競争スタイルの確保が社会的厚生観点から求められるのか、著者の今後の研究に期待したい。

著者はIT関連産業の情報サービスの生産と開発は水平的・垂直的に占有する部分が広がっており、それは新しいタイプの独占ととらえうるとしている。またそれは情報サービスを提供するうえで必要であるとともに、それは競争の優位性を中間財の内部化という形で、連続する生産プロセスの各層やセグメント市場における支配力を強めているとしている。

近年、Google、Amazon、Facebook、そしてAppleの頭文字をとったGAFGAがアメリカやEUの競争政策を担う機関から市場における優越的立場から不当に競争を阻害しているとして巨額の制裁金を科されてきている。最近では企業分割を求める意見も出てきているが、競争政策の観点からIT産業のイノベーションと事業展開をいかに診るのか、著者の意見を期待したい。

第四に、ハイテク産業集積地の盛衰の検証についてである。本書ではアメリカにおいて広く知られているハイテク産業の集積地としてシリコンバレーやボストン近郊のルート128、そしてリサーチトライアングルパークのうち、ルート128を除く二大集積地について特に詳細な分析がなされている。

かつて、Saxenian, A. [1994], *Regional Advantage*, Harvard University Press.でシリコンバレーとルート128の起業形態や企業連携・地域文化の差異を論じて注目を浴びたわけだが、日本においても2009年に『現代の二都物語』として日経BPから訳本が出版されるほど注目を集めるに至っている。

前述のように、本書ではルート128の分析は対象ではないのだが、シリコンバレーとの対比で「その後の二都物語」としてその盛衰について今後その検証を期待したい。

余談ではあるが、本書のタイトル『進化するアメリカ産業と地域の盛衰』について論じたい。この本のタイトルを文脈として読むと、二通りの解釈ができよう。すなわち、A. 進化するアメリカ産業and地域の盛衰、そしてB. 進化する(進化過程での)、アメリカ産業と地域の盛衰である。どこで文脈を区切るかというたわいもないことであるが、最後にその点について記したい。

通常はAの解釈が正解であろうが、Bであるとやや違った観点から本書を眺められる。

すなわち、産業発展の段階に合わせた地域(都市)の進化過程、あるいは地域(都市)発展の段階に合わせた産業の進化過程について、成長・成熟・衰退といった段階をライフサイクルとしてとらえて本書を読むとよりアメリカについて深く理解できる。本書はA、Bいずれの解釈に沿って読んでもその理解に迫れる力作である。

(御茶の水書房、2019年3月29日)